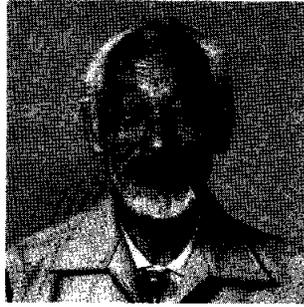


自分の フィールドをもとう



三浦 二郎

ここ4～5日続いている、高気圧の居すわりがもたらすさわやかな好天は北海道独特のもので、今朝もまた抜けるような快晴である。例の通り双眼鏡を首にぶら下げ、フィールドノートを持っただけの軽装で、但しセーターの上にはよれよれの濃緑の古グランドコートを羽織り、足音を立てないようなゴム長靴をはくフィールドマナーの身仕度だけは数十年来続けている身についたものでもある。

玄関フードを開けて外に出る。つい先日までは、クロツグミ・ウグイス・エゾムシクイ・アオジ等が一齐に迎えてくれたのだが、その連中は子育てに忙しくなったのかひっそりして一声も聞き止められなかったが、そのかわりキセキレイの気ぜわしいひとくさりが樽前川の溪谷の中から聞こえ、その声は次第に下流の方へ消えていった。

宅地造成がなされたまま住宅建築がはかどらなく、あたり一面は荒蕪草原になっている。この草原に優占しているエゾヤマハギが開葉したので、完全に初夏の新緑の姿になったし、路傍のオーチャードには早くも黒褐色が出穂し始めた。その草原をこげ茶色のものが横切った。夏毛のエゾユキウサギだ。そしてもう一頭別の方角へも走って行った。夫婦だったのだろうか。

ヒバリとオオジシギがしばらく振り中空をにぎわし、ノビタキとピンズイとホオジロが交替に電線に止まって喉をふるわせる。この連中は子育てがひとしきり終わったものであろうか。

造成宅地区域が終ると、緑のトンネルに入る。ウシコロシの白い小花のかたまりは花びらの一つ二つを残すだけになり、替ってウワミズザクラとナナカマドが白花のかたまりをつけ始め、チョウセンゴミシがからまってその薄ピンクの花が木の幹を飾っている。

ホオノキの白っぽい大きな葉が空に向って開き始め、キウルシの葉柄の赤味が薄れてきて雑木林は新緑の薄暗さに支配されてきて、その中からオオルリ・コルリ・キビタキの声が湧いてくる。

フィールドノートにはこれらが次々にチェックされ、二つの樽前ガロウ橋を渡っての一巡コースが、毎朝の私のフィールドである。

このコースは都市住まいの人から見るとぜいたくなものかも知れないが、都会地の中でも自分のフィールドを持てることは、国立科学博物館の矢野氏「街の自然観察」の著書が示唆している。

三浦二郎 (みうら じろう)

1925年朝鮮京城府 (現ソウル市)

に生る。京城師範卒。空知、釧路、根室管内小中学校を歴任1965年退職。現在野鳥の会理事。協会副会長。